

他力信仰録

目次

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
蚯	汽	所	月の光で	親は自分を責める	谷本米一君へ	無邪氣	両親へ	疑いなき本願	血潮の跡	
蚓	船	感								
古	古	六	六	六	望	望	六	六	一	
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	
南無阿彌陀佛	堪忍さしたは親の力	私の心中	今の事を	脚氣	不思議	知つたのと信じたの	関東地方の大震災	卒業後	私の領解	
六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五二	七一	七一	

21	母の手紙の中に……………	三三
22	自問 自答……………	三五
23	極善最上の法……………	六六
24	もう知らないぞ……………	六六
25	有 上 小 利……………	六八
26	親が試験を受けるのだ……………	六〇
27	牛 の 轆 死……………	六四
28	病 氣……………	六五
29	逃げても逃げても……………	六五
30	私 ……………	六六
31	坊 主……………	六七
32	借 物 じ や……………	六八
33	来いと呼ばれて行くのなら……………	六九
34	嗚呼お母さん……………	七一

35	死すべき私を……………	一〇三
36	お 壽 司……………	一〇五
37	私 の 心……………	一〇六
38	無 我 の 信……………	一〇六
39	絶対他力の南無阿彌陀佛……………	一一三
40	地 金……………	一一四
41	不 思 議……………	一一四
42	稱 名……………	一一五
43	何ともない……………	一一六
44	あの人が死んだか……………	一一六
45	人の言葉は信ずるが……………	一一七
46	風 鈴……………	一一八
47	父 母 の 恩……………	一一九
48	無義を義とす……………	一二〇

49	不思議の佛智……………	二三
50	何物もたよりにならない……………	二三
51	親……………	二五
52	私……………	二六
53	人……………	二六
54	久遠の凡夫……………	二六
55	法然上人宣く……………	二六
56	一寸驚いた……………	二九
57	子供を育てるに……………	二九
58	弘中長一氏言く……………	三〇
59	上岡みよさん言く……………	三三
60	無慚無愧……………	三三
61	疑うまい……………	三三
62	同じ御馳走よばれても……………	三三
63	他人佛なら……………	三三
64	南無阿彌陀佛……………	三四
65	寸感……………	三四
66	信火の有無……………	三四
67	私……………	三五
68	世の中は顛倒である……………	三六
69	私は本当に仕合せ者……………	三六
70	新らしい釣瓶と古い釣瓶……………	三六
71	南無阿彌陀佛……………	三九
72	或る学生よそれでよいか……………	三九
73	浮か浮か暮しては……………	四一
74	猫様猫様……………	四一
75	世の中は苦の土……………	四一
76	私の心……………	四三

77	死か生か	一四
78	蠅取紙	一四
79	寺に參れば睡る人	一四
80	学問や理窟	一四
81	大久保さん言く	一四
82	川西さん言く	一五
83	東屋の爺さん言く	一五
84	弘中氏言く	一四
85	友岡氏言く	一五
86	上岡さん言く	一五
87	真田氏言く	一五
88	得手に聞いては困る	一五
89	佛様が相手じゃぞ	一五
90	小さい虫	一五

91	窮窟な宗教ではない	一五
92	墮ちる者を	一六
93	「はい」と眞受けに	一七
94	歡喜と懺悔	一七
95	機を見るか法を見るか	一八
96	南無阿彌陀佛	一八
97	空氣の中	一九
98	慚愧慚愧	一九
99	佛土の異名	二〇
100	雨山の御恩	二〇
101	破れた儘	二〇
102	墮ちん者も助かつた味は判らん	二〇
103	天地の恵み父母の恩	二〇
104	隱徳を積み	二〇

118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105
間違えるな	菊	見ただけでは	只なら上げる	独樂と達磨	煙管を見て	一人息子	抱かれて帰る	一万噸の大船に乗つた時	熱	狼藉者	喝	一切の有情は悉く父母	無眼人無耳人
二二五	二二四	二二四	二二三	二二一	二二〇	二二〇	二〇九	二〇九	二〇八	二〇七	二〇七	二〇五	二〇五

132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119
演習と実戦	素直な柄か	恕	母よりの手紙	両親へ	誰でも不平はある	まる他力	不実の心	今の心	横に匍う	鱗螺同行は駄目	大雨大風	あんなた方	よく似ている
二四二	二四一	二四〇	二三〇	二三三	二三一	二三三	二三〇	二二九	二二九	二二八	二二七	二二六	二二六

146 145 144 143 142 141 140 139 138 137 136 135 134 133

何を愚図愚図して居るか……………	二四三
人の後生ではないぞ……………	二四四
墮す事を抜かして……………	二四五
機を見よと誰が言つたか……………	二四六
輝く法悦……………	二四九
唯の唯……………	二五〇
八万の法藏も……………	二五一
年に一度じやもの……………	二五四
熱いを熱いと……………	二五五
何故こんなに意志が強いか……………	二五六
何に死ぬる迄じや……………	二五七
報ずべき道を知らない……………	二五八
何故聞いて下さない……………	二五九
大事じや……………	二六〇

151 150 149 148 147

水車の様に……………	二六二
老人の姿を見て……………	二六三
喜ばない心……………	二六三
合掌……………	二六三
み佛様……………	二六四

(終)

はしがき

淨土眞宗は絶対他力の宗旨である。道俗共に思いもし言ひもして居るけれども、悲しい哉半自力半他力に流れて不可思議の願海に帰入された方は甚だ稀である。自分の思い振りや心得振り、信じ振りや領解振りに氣を留めて本願に調子を合わしお聖教の型に合わすのは皆他力によく似た自力である。

絶対他力の信仰は苦逼失念の機を貫いた南無阿彌陀佛の独り働きであるから、あつともすつとも言えない味、不可稱不可説不可思議の信樂であつて「嗚呼」と口に出ぬ先に他力の信の一念は済んで居るのである。私の機に合わした南無阿彌陀佛だから、信に信功なく行じて行功も認めず、あら心得易の安心や、行き易の淨土や、泣くに泣かれぬ心のなりを無条件で赦して下さつた願力不思議の親様よなアと仰がずには居られなかつたのである。身も心も南無阿彌陀佛と驚いて見れば廣大の恩徳

を謝せずには居られない、深遠なる佛徳を讚歎せずには居られない。

此の『他力信仰録』は眞実に成り得ないで泣いた私、妄念の去らない曠劫流轉の下下の私が西も東も墮ちるも參るも知り切らず、ざり／＼舞いして苦しんで法を求め、疑うなと言われて益々疑い、法を眺めて居れば自然に夜は明けると言われても機の始末に困り、其儘と言われたらどの儘かと曲り、只と言われるれば放逸に流れ、眞劍に成つたと思う下から平氣な心が出て来る、持ちも携げも成らぬ謗法闡提の法龍が、現在業火に苦しめられて三定死の決定が付いたと同時に三世の業障は一時に消滅され、法龍一切の無明は晴れ、法龍一切の志願は満足させられ、信樂開發の一刹那に心の往生をさして戴いた信仰を記した録であるから、尋常一樣に通り一遍に眞宗を聞き流して居らるる方や、すなおな眞似している同行、疑いは無いと平氣でいる信者、人様よりは慶べる、自分は心得振りがよいと思ひ、而も往生を死後の事の中に考えて居らるる善人は怪我するから決して読んではならない。

信法の徹底しない人に信機の徹底した人が無い様に信機の徹底しない人にも信法の徹底した人は居ない。多くの道俗の中に口では墮ちる者と言つて居るけれども墮ちた事が無いから助かつた自覚が無い、自分の機を見て恐ろしい様な信仰では臨終の閑所は越されまい。私は信じて居るから人は墮ちても自分は助かる者と初から決めて法座に出ては居ないか、それこそ邪見憍慢の惡衆生である。自分が自分に誤魔化されて居る間は極難信の法は耳には入らない。

願くば此の録を御批評下さる前に、各自、他力不思議の願海に帰して妄念の奔流するに就けても往生は一定なりと感謝し得らるるや、義なきを義とする妙味を体得せられしやを御反省下されば幸甚。

合掌

大沼法龍